



TITLE:

ティリッヒと平和の神学

AUTHOR(S):

芦名, 定道

---

CITATION:

芦名, 定道. ティリッヒと平和の神学. ティリッヒ研究 2003, 7: 1-10

ISSUE DATE:

2003-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/57624>

RIGHT:

## ティリッヒと平和の神学

芦 名 定 道

### 1. 問題

ティリッヒが、自らの思想を特徴づける言葉として、「境界」(Boundary)という用語を挙げていることはよく知られた事実であるが、本論文では、ティリッヒと平和の問題を論じるにあたって、ティリッヒ思想における「理論と実践の境界」に注目してみたい。<sup>(1)</sup>ティリッヒ自身の、そして多くの研究者の判断によれば、ティリッヒの基調にあるのは、「理論」であり、その点から、ティリッヒは基本的に理論家であると言える。

「私の特徴が実践的活動ではなく理論にあることは、他者にとってのみならず、わたしにとっても疑いの余地がない。」(Tillich[1936], p.17)

しかし、ここからティリッヒ思想が単なる机上の事柄であったと解するならば、それは全くの誤解であり、ティリッヒが、歴史的状況へ参与する中で思索したこと、つまり、理論と実践の境界にこそ、彼の思索の現場があったことに、我々は注目しなければならない。とくに今回取り上げる「平和」についてティリッヒの思想は、この現場を抜きにしては理解することができない。第一次世界大戦への従軍牧師としての参加、1920年代を中心とした宗教社会主義運動との関わりとその後のナチズムとの闘い、そして第二次世界大戦期における戦後ドイツの民主化についての提言、さらには晩年の東西冷戦下での核問題への取り組みなど、こうした歴史的状況への参与こそが、ティリッヒの平和論の現場だったのである。

では、平和論に注目することは、ティリッヒ研究にとっていかなる意義を有しているのだろうか。アメリカ時代におけるティリッヒの非政治化といった典型的な誤解を修正する他にも、ティリッヒ思想の形成過程、とくに後期の存在論の形成過程を理解する上で、平和論は重要な手がかりを与えてくれる。こうした点を念頭に置きながら、以下、平和論の展開過程が、後期ティリッヒを特徴づける存在論形成の文脈であることを、具体的に見てゆくことにしたい。近年、ティリッヒの政治思想や社会思想は、ティリッヒ研究のテーマとして注目されるようになってきており、<sup>(2)</sup>これは、ティリッヒ思想の現代的意味を論じる上で、重要な論点の一つと

言える。というのも、実に境界とは、ティリッヒ自身が述べているように、創造的な思想形成にとって決定的な意味を有しており(ibid., p.3)、その点は、現在も変わらないからである。

## 2．平和へのアピール

ティリッヒは、その生涯を通して政治状況との密接な関わりの中で思索を行っており、ティリッヒの思想はときどきの政治状況における平和へのアピールという意味を有していたのである。本章では、この平和へのアピールに現れた思想的特徴を、平和論の持つ現実主義的性格という観点から考察することにした。そのために取り上げたいのは、ストーン編集の論文集『平和の神学』に収められた諸論文である。<sup>(3)</sup>

ティリッヒの平和論の特徴は、人間はユートピア主義のもたらす幻滅を超えて、いかにしてなおも希望を抱き続けることができるのか、という問いとの関わりで理解できるように思われる。これは、非現実的な理想主義(ユートピア主義)と現状肯定的な現実主義に対して、第三の道を求めるということであり、1920年代後半以降、信仰的現実主義として表明された立場に他ならない。<sup>(4)</sup>たとえば、正義の問題との関わりで、次のように述べられている。

「正義は外部から強いられた抽象的な法ではない。正義とは存在の実体の表現である。つまり、それは愛である。正義は不可思議な法ではなく、本質的な法である。したがって、それは生の自己実現と結合しており、生の否定ではない。それはいかなる現状の保障でもなければ、無力なユートピアの約束でもない。それはカイロスのうちに存在する。自然法は生と力への関係における正義の原理である。愛はそれ自体をカイロスにおいて実現する。これが生と正義の一致である。」(Tillich[1943], pp.77-78)

平和を求める行為は、完全平和という理想世界を自明のものとして夢想することでも - このユートピアの夢想は幻滅に至らざるを得ない - 、また反対にいわゆる現実主義を標榜して理想を断念することでもない。それは、歴史的現実には脚しつつもその状況にまさにふさわしい仕方において - カイロスにおいて<sup>(5)</sup> - 、理想の実現に向けて努力することなのである。そのために平和を求める者は、歴史の現実と理想との間に立つことを要求される。それは、最終的平和ではないとしても、今可能な、いわば断片的な平和の実現を望み見ることに他ならない。<sup>(6)</sup>すなわち、

「平和と正義が統治する歴史の最終段階を希望することはできない。歴史はその経験的な終局において成就されるのではない。そうではなく、何か新しいものが創造される偉大な

瞬間において、あるいは宗教的に表現するなら、神の国が実存の破壊的構造を征服しつつ歴史の内に突入してくる偉大な瞬間において、歴史は成就されるのである。戦争は、そうした破壊的構造の最大のものの一つである。このことは、歴史内における正義と平和の最終段階がわれわれの希望できるものではないことを意味している。それでもわれわれは、時間の特定の瞬間における悪の力に対しての部分的な勝利を希望することができる。」(Tillich[1965a], p.181)

ここで、強調したいのは、こうした平和への努力が抽象的な理論としてではなく、次の引用からもわかるように、第二次世界戦後ヨーロッパにおける民主主義と平和の確立という具体的な課題との取り組みにおいてなされている点である。

「他方ヨーロッパが、崩壊しつつある独占資本主義の避けがたい侵略性や、ファシズムの傾向を助長した温床を、それ自体の中で克服できたとするならば、ソ連はこのようなヨーロッパを脅威とは感じないであろう。ヨーロッパの国々の間の境界線という、他の仕方では解決できない問題を解決できるのは、まさにこうした方法だけなのである。つまり、ただひとつの、そしてただひとつ正当な解決策は、境界が取るに足らないものとなることである。」(Tillich[1944], p.100)

この「国々の間の境界線」が取るに足らないものとなる - あるいは、取るに足らないものとする - という発言は、平和のために主権国家の利害を相対化することを意味する。この論文が書かれた 1944 年当時、そしてその後の東西冷戦体制下においては、こうした国家の相対化という考えは、非現実的に見えたかもしれない。しかし、東西冷戦後の今日、民族主義や国民国家が平和を疎外する側面を持つことがいよいよ明らかになってきた中で、ティリッヒのこの平和論は再評価に値すると言えよう。おそらく、EU が掲げる理念はティリッヒが 1940 年代に目指した民主的な統一ヨーロッパに近いものと言えるかもしれない。最後に、核兵器をめぐるティリッヒの発言を引用することによって、この章を結びたい。この核兵器に対するティリッヒの議論については、絶対的で無条件的な核兵器廃絶論の立場からの異論も予想されるが、どの見解を支持するにせよ、核兵器の問題は、改めて議論を要する事柄のように思われる。<sup>(7)</sup>

「倫理的原理の基礎において、この提案は、敵の軍隊とその基地に対して直接なされる完全破壊の原子爆弾（戦術的な原子爆弾も含め）と、いわゆる従来の兵器との間に、はっきりした区別をつける。もちろん、原子爆弾は後方に残ることになる。しかし、われわれの社会的・倫理的責務を自覚することによって、原子爆弾を最初に再び使う者とはならない

ようにしなければならない。」(Tillich[1961a], p.161)

### 3．後期存在論の形成過程

ティリッヒの平和論に関して、次に取り上げたいのは、以上見た歴史的状況への参与と、1950年代の存在論との関わり、つまり、前者が後者の成立の文脈であったという点である。1954年の『愛、力、正義』では、50年代の存在論の枠組みにおいて平和の問題が論じられており、これを40年代の諸論文と比較することによって、後期ティリッヒの存在論の形成過程を具体的に跡づけることができる。

「力と正義を神学の原理として取り扱いながら、ここでは三つの主張がなされる。つまり、第一に、力とはまさにその定義によれば正義を含意しているということ。第二に、正義とはまさにその定義によれば力を含意しているということ。第三に、存在そのものの構造を表現することができる最も崇高な概念である愛においては、力と正義の両方が含意されているということである。」(Tillich[1944], p.89)

この基本命題は、そのまま『愛、力、正義』の基本テーゼとすることが可能であり、40年代の平和論と、存在論に基づく50年代の思想とは内容において基本的に一貫している。しかし、40年代の思索と50年代の思索との間には、概念規定の方法論において、明確な進展を見ることができる。40年代の議論では、愛、力、正義の相互関係を厳密に論じる方法論はまだ明示されていないが、まさに、この方法論レベルでの明確化という理論的作業を通して構築されたのが、50年代の存在論だったのである。ティリッヒによれば、愛や力や正義といった諸概念が様々な状況において使用される場合に注目すべきものは、それらの概念の多様な使用(多様な意味)を規定する根底的意味(root meaning)であり、存在論とはこの根底的意味を解明するための方法として位置づけられる(Tillich[1954], p.586)。後期ティリッヒにおける存在論は、人間存在の存在構造の分析(存在論の人間学)に基づいて、様々な存在するものの共通構造(common structures)の解明を目指すものである。それゆえティリッヒの主張は、たとえば、愛という言葉が適応される様々な現実や現象に共通する構造を解明するには、つまり、愛という概念の根底的意味を論じるには、後に見るように、人間存在あるいは生の基本構造の分析から理論構築することが必要であるとの意味に解することができよう。

この存在論という方法論については、ティリッヒの議論から次のような具体的な内容を取り出すことができる。

意味論的分析：愛、力、正義など長い歴史的背景と多様な文脈を有する言葉には、様々な

曖昧さが伴っており、したがって、まず言葉の意味の整理から、つまり意味論的分析から、考察を始めなければならない。たとえば、ティリッヒは、「力」という概念について、それが本来、社会学的カテゴリーであり、そこから自然の領域へ移されたと指摘する(ibid., p.588)。確かに、このように言葉の意味が隠喩的に拡張されることによって、現実についての新しい認識が獲得されるわけであるが(隠喩の発見的機能)、しかしそこにはしばしば概念の混乱が伴う。とくに、ティリッヒは、国家が人格化されるとき、個と共同体のレベルの混同という理論的問題が生じるだけでなく、ナチズムの指導者原理に見られるような致命的な倒錯が起こることを指摘している。したがって、言葉の意味の批判的分析は存在論にとって必要不可欠な作業なのである(ibid., p.586)。

経験(出会われた現実)の記述：ティリッヒは、言葉の整理に続いて、愛などの諸概念が使用される具体的な現実や現象の記述へと論を進めてゆく(ibid., p.595)。これは、ティリッヒの存在論が現象学的記述という方法を採用していると解することができる。つまり、諸現象(典型例)からその基本構造(本質)を直観的に把握するという手続きは、まさに現象学的な本質直観と言えるものであって、言葉の意味の把握は、「出会われた現実」(the encountered reality)という人間存在の経験の領野において行われるのである。

経験的検証：こうして構築された存在論は検証を必要とする。つまり「愛の存在論は、充実された愛の経験によってテストされ」ねばならない(ibid., p.596)。もちろん、こうした検証がいかなる仕方で行われうかは大きな問題であるが、個別的経験からの一般化を通して定式化された存在論が、多様な経験領域における検証を必要としているとの指摘は重要である。<sup>(8)</sup>

以上から確認できるのは、50年代の存在論は、平和の理論的基礎を方法論的に明確化する中で形成されたことである。ここに、理論と実践の境界における思索の一つの具体化を見ることができよう。しかし、こうした方法論的な展開は、40年代の諸論文と50年代の存在論との連続性あるいは発展のいわば形式的な側面であり、次にこの連続性は思想内容の観点からも確認されねばならない。ここでは、正義と力との関係を中心に考察を行うことにしたい。

1940年代の平和論の内容は、原理をめぐる理論的考察から、具体的な状況分析や政策論まで様々な内容を含んでいるが、とくに注目すべきは次の議論である。

「力と正義が分離されるならば、そのような戦後再建の解決策はすべて誤りである。しかし、もちろん、具体的な解決策が力と正義の統一であるか否かということは冒険的な決断の事柄であって、それは悲劇的な誤りとなるかもしれない。正義と力の統一においては、より多くの正義がより多くの力を造り出し、その逆もまた同様なのである。それにもかかわらず、われわれは危険を冒さねばならないし、またあらゆる決断において、力のために力を適用する帝国主義の精神だけではなくて、正義の原理を抽象的に適用する律法主義の

精神をも避けねばならないのである。」(Tillich[1944], p.94)

第二次世界大戦後、平和を再建するにあたって、ティリッヒが問題にするのは、恣意的な帝国主義的な力と形式主義に陥った律法主義的な正義という二つの誤謬に対して、正義と力との統一をいかにして創出するのかということであった。ティリッヒは、一方で、これを、敗戦国ドイツをいかに処遇するのかという具体的な問題として論じているが、<sup>(9)</sup>他方では、この正義と力の統一を根拠づけるための理論構築を試みている。1954年の『愛、力、正義』における「愛の存在論」は、まさにその成果と言える。「生は反抗し、力は正義に対抗する」(Tillich[1943], p.77)と言われるように、力と正義を統合することは困難な課題であるが、ティリッヒは、「力と正義を統一する解決策」(Tillich[1944], p.99)を求めて、愛の存在論の構築を試みたのである。それは、前期ティリッヒにおいて若きヘーゲルの生と愛の弁証法が集中的に論じられたことを思い起こさせるが、<sup>(10)</sup>次の引用は、ティリッヒの基本的な発想をよく示している。

「正義と力との間のこの緊張は、恣意的な力と形式的な正義の両方の上位にあって、それらを統合する原理に対する探求へと向かわせる。この原理とは愛である。根本的な意味において愛について語る場合、私が意味しているのはエロスあるいは共感における人間的愛情ではない。また、それは新約聖書が語るアガペーのことでもない。愛についてのこれらの意味すべては、存在それ自体が有する愛の構造に根ざしている。存在とは、個別的なものを分離し、交わりを再統一する、連続的な過程である。」(ibid., p.94)

詳細をここで論じることはできないが、1954年の『愛、力、正義』では、この正義と力の統一をめぐり、愛の存在論が次のように展開される。まず、愛、力、正義という諸原理を論じるために、人間存在の存在構造の分析が基礎に置かれていることは、先に指摘したとおりであるが、この存在論的人間学の出発点となるのは、人間の生(life)あるいは存在(being)である。ティリッヒの存在論では、この生と存在の関係理解には曖昧さが見られるものの、<sup>(11)</sup>「生は現実性における存在であり、また愛は生を動かす力である」、「愛は分離されたものを統一へ駆り立てるものである」(Tillich[1954], p.595)という点から、両者の関係は次のように整理することができるであろう。存在が可能性と現実性を包括する基本概念であるのに対して、生は人間存在をその現実性において規定するものとして導入され - 「生は存在の動的な現実化である」(ibid., p.602) - 、その際に、生は、分離されたものが再統一をめざす運動として理解される。この生の運動を規定する原理が愛に他ならない。問題は、この愛の原理は、その内に、力と正義の二つの原理を統一的に含んでいる点である。一方で、愛は再統一へと駆り立てる推進力で

あるという点で、力の原理を内に含んでいる。愛とは、単なる情動ではなく、「情動の状態にある存在の全体的な参与」を表現する存在論的概念なのである (ibid., p.596)。スピノザを念頭に置きながら、<sup>(12)</sup>「すべての存在は自らの存在を肯定する。その生はその自己肯定である」 (ibid., p.602)と言われるが、実に、「力とは、存在の自己肯定の可能性なのである」 (ibid.)。しかし、この再統一へと推進する愛あるいは力は、恣意的で無秩序なものではない。なぜなら、再統一とは一定の形式あるいは秩序を前提とするからである。「現実化された存在、すなわち生は、力動性と形式とを統一」しており (ibid., p.608)、「愛は正義の原理」であり、「存在の正義はこの運動の適切な形式」と言わねばならない (ibid., p.609)。

以上の議論は 1951 年の『組織神学』第一巻において、存在（人間存在）の両極性の一つとされる「力動性と形式」の両極性との関わりで、次のようにまとめることができる。<sup>(13)</sup> すなわち、生あるいは存在が、その存在論的構造において、力動性と形式の両極構造によって規定されるように、生あるいは存在の基本構造を規定する原理としての愛は、その現実態において、力と正義の二つの原理を両極構造において包括しているのである。このように愛の力動性を示すのが力であり、愛の形式に対応するのが正義であるとするならば、力と正義の統一は、まさに愛の原理の内に求められねばならないことになる。こうした愛の存在論に依拠しつつ、ティリッヒは、たとえば次のような重要な帰結を導き出している。

「平和主義の功績は、その神学的な欠点にもかかわらず、それがこの問題を現代のキリスト教において活性化したことにある。平和主義がなかったならば、おそらく教会はすべての宗教的な戦争肯定が持つ真理を歪曲するゆゆしさを忘れてしまったかもしれない。他方、平和主義は、通常人間の現実存在のはるかに広範にわたる問題を戦争問題に限定してきた。しかし、同じ人間の現実存在の領域には、同様に重大な他の問題が存在しているのである。」 (ibid., p.638)

平和主義の意義を認めつつも、人間の政治的あるいは社会的な問題を、戦争にのみ形式的に限定するという立場を批判する点に、愛の存在論に基づく、ティリッヒの平和論の特徴 - 平和を生の基本構造から、その全体性において捉えること - を見ることができるであろう。

#### 4．まとめ - ティリッヒ平和論の現代的意義

以上のティリッヒの平和の神学については、様々な現代的な意義が指摘できる。とくに強調したいのは、現代のキリスト教思想にとって、境界に立って思索することが、決定的な意味を持っている点である。ティリッヒの平和論においては、一方で、歴史的現実を原理にさかのぼ



って根本的に問いなおすことが繰り返し試みられ、その結果 50 年代の存在論が構築された。しかし他方、こうして構築された理論体系については歴史的状況における検証が様々な仕方で行われているのである。この状況から原理へ、原理から状況へという二重の思索の運動、これこそが、現代のキリスト教思想がティリッヒの平和論から学ぶべき第一のものであるように思われる。形式主義的な原則論（抽象的な平和論）と現状追認的な現実主義（平和論の放棄）という不毛な対立状況を超えて前進するために、現代のキリスト教思想は「理論と実践の境界」で鍛えられなければならないのであって、ティリッヒの思想はそのための貴重なモデルと言えるのではないだろうか。

最後に、現代キリスト教思想の中心テーマの一つである、宗教的多元性における西洋キリスト教世界の相対化という問題にも関連した次の引用によって、本論文を終わりたい。（<sup>14</sup>）

「私の第一の問題は、回勅（1963 年の教皇ヨハネ 23 世の回勅。引用者補足）を規定している原理についての合意が西洋のキリスト教的ヒューマニズムの文化圏に制限されており、本質的にはそれを越えていかない、という事実から生じている。したがって、もしわれわれが＜地上の平和＞を構想するならば、多数の文化集団が存在しており、そのいくつかは何千年にわたる異なった宗教的伝統によって形成され、そこにおいては個人の尊厳という原理は究極的なわけではないという事実を心に留めておかなければならない。西洋に対してあたえるだけでなく受け取ることを要求するような、長期にわたる相互浸透によってのみ、状況を変えることができる。こうすることが回勅の精神を信奉する人々がその帰結のいくつかを、たとえば自由や平等といった特殊な観念を、他の原理をもった人々に押しつけようと試みることを抑止するだろう。こうした原理を押しつける試みは、たとえそれが外見的に勝利を導いたとしても、無駄なことである。」(Tillich[1965a], p.175)

## 註

(1)この「境界」をめぐるティリッヒの自伝的な文献としては、次のものを参照。

On the Boundary, in: *The Interpretation of History*, Charles Scribner's Sons 1936, pp.1-73

(2)アメリカ亡命後も視野に入れたティリッヒの政治思想および社会思想についての研究としては、次のストーンの研究が先駆的である。

Ronald H. Stone, *Paul Tillich's radical social thought*, John Knox Press 1980

さらに最近の関連テーマをめぐる研究としては、次のものが存在する。

Wolf Reinhard Wrege, *Die Rechtstheologie Paul Tillichs*, J.C.B.Mohr 1996

Kodzo Tita Pongo, *Expectation as Fulfillment. A Study in Paul Tillich's Theory of Justice*,  
University Press of America 1996

Mary Ann Stenger and Ronald H. Stone, *Dialogues of Paul Tillich*, Mercer University Press 2002

(3) Theology of Peace, ed. by Ronald H. Stone, Westminster/John Knox Press 1990

この論文集は、最近、本現代キリスト教思想研究会のメンバーによって、邦訳された。パウル・ティリッヒ『平和の神学 1938-1965』新教出版社、2003年

本論文での引用は、この邦訳によって行われるが、引用頁の指示は、原典のものである。

- (4) 1927年の「信仰の現実主義」では、現実主義との関係で、1. 行き当たりばったりの政治、2. 信仰なき現実政治・懐疑的政治家、3. ユーピア的政治、4. 無制約的なものを指示する政治、という4つの類型が示されるが、十分な意味で政治思想とは言えない「1」は別にして、2と3は、本論文で、現状肯定的な現実主義、非現実的な理想主義と表現したものに对应しており、それに対するティリッヒの平和思想は、「4」の無制約的なものを指示する政治という信仰の現実主義に相当すると言える。

Gläubiger Realismus, in: MW.4 S.190

- (5) 今が歴史の転換点、決定的な時であるとのカイロスの意識が、いかなる確実性を有するのかということとは、宗教社会主義者ティリッヒにとって切実な問いであった。それにするティリッヒの答えは、カイロスの意識がユートピアの完全な実現を錯覚する場合、必然的に誤謬に陥らざるを得ないが、現に可能なユートピア的状况の断片的実現を先取りのに捉えている限りにおいて - 厳密には、カイロスにおけるユートピアの断片的な現実化に捉えられることによって、その断片的現実を捉える - 、真理を有するというものであり、これは信仰の現実主義へと結実することになった。以上に関しては、次の拙論を参照。

芦名定道 「ティリッヒのユートピア論」、『ティリッヒ研究』第3号 現代キリスト教思想研究会  
2001年、73-82頁

- (6) これは、生の両義性とそれを克服する非両義的状况の断片的な先取りという、『組織神学』第三巻の議論を、平和というテーマに対して適応したものに他ならない。
- (7) 平和思想において核兵器の問題を論じる場合、それが単純な反核であり得ないことは、次の池明観の議論が示すとおりである。池は、世界平和にとって核の問題の重要性を認めつつも、「それ（ベトナムの問題。引用者補足）は核戦争に対する恐れからのみ考えるべき問題ではなく、先進国の現状維持の政策の下で苦しむアジア人の悩みというもっと深い意味で取り上げられねばならない」（池明観『アジア宗教と福音の論理』新教出版社 1970年、21頁）と主張している。
- (8) この点で、ティリッヒと共に、20世紀の思想状況の中で形而上学・存在論の本格的な再建を試みた、ホワイトヘッドの思弁哲学が、「一般化と多様な経験領域における検証」という同様の議論を行っていることに注目したい。

Alfred North Whitehead, *Process and Reality. An essay in cosmology*, The Free Press 1929(1957), pp.5-21

- (9)「征服された者をどう扱うことが正当なのか。ドイツ人は侵略者であるが、彼らが最初に征服されるのであろう。ドイツ人が征服されるのは、国家社会主義が社会主義運動やソ連に対抗する唯一の勢力である限りにおいて、それに好意的であった連合国軍によって打破されたからである。より罪深いのは誰なのか。ドイツ人なのか、それとも彼らを道具として、デーモン的なものに引き渡す助けをした人々なのか。それ以上に、ドイツ人に対する否定的な態度は、生と愛の自己実現の原理に矛盾する。」  
(Tillich[1943], p.85)

- (10)ティリッヒのヘーゲル論については、次の拙論を参照。

芦名定道「前期ティリッヒとヘーゲル」、組織神学研究所編『パウル・ティリッヒ研究』 聖学院大学出版会 1999年、pp.166-198

- (11)この存在と生をめぐる概念規定の曖昧さは、ティリッヒにおける存在概念の位置づけの変化を反映している。後期ティリッヒの存在論では、存在概念がもっとも基礎的な概念として位置づけられているが、それは前期ティリッヒにおける存在論の限定的あるいは二次的な扱いと対照的であり、前期の思索では、むしろ意味概念あるいは生概念が思惟の基本に置かれている。この前期から後期への移行が、中期から後期にかけてのティリッヒにおける後期存在論の形成過程となるのである。

- (12)『愛、力、正義』における「力」の存在論的理解が、ハイデggerのニーチェ論との関連も含めて、ニーチェの「力への意志」に結びついていることは、ティリッヒ自身が述べる通りであるが、存在における自己肯定の力がさらにスピノザの努力(*conatus*)を念頭においていることは、『愛、力、正義』と同時期の次の文献より明らかである。

*The Courage to Be*, in: MW. 5, pp.149-155

また、この点については、次の研究論文も参照。

今井尚生「ティリッヒとフロム - 自己愛を巡って - 」、『ティリッヒ研究』第5号 現代キリスト教思想研究会 2002年、19-33頁

- (13)Tillich[1951], pp.178-182

- (14)キリスト教(制度的宗教としてのキリスト教会)の相対化という視点は、21世紀の現在という歴史的時点における、カイロス意識の立った現実主義と言えるかもしれない。我々がティリッヒの思想から学ぶべき第一の点は、歴史的状況からその意味を読み取る現実主義的態度と言えるであろう。

(あしな・さだみち 京都大学大学院文学研究科助教授)